

# 論理的文章読解の授業における 主体的・対話的で深い学びの探究

学籍番号 209308

氏名 小林隆人

主指導教員 成實朋子

## 1. 研究の目的

本研究を通じて、高等学校における新しい評論文の指導についての実践を行い、評論文を通じていかに活用的な学力をつけることができるかということを考究したい。また、高等学校における論理的文章読解の授業における【主体的な学び】、【対話的な学び】、【深い学び】が、どのような具体的姿を持ちうるのかを明らかにしたい。そして、その【三つの学び】を実現するための、高等学校国語科における論理的文章の教材研究の視点について学び、授業づくりの具体的戦略を提案したいと考えている。

## 2. 基本学校実習 I・II の概要

基本学校実習の概要について説明する。実習校は多様なコースが設定されているがゆえに、在籍する生徒の学力や目的にはばらつきがある。このため、どのレベルの生徒を目線に授業を行うのかに苦心する教師が多かった。また、選択制の授業が多く、同じ国語の中でも、様々な科目が設定されているため、各授業で継続的に指導をすることが困難であるという課題も存在した。以上のような状況を受けて、特定の学力層に限定するのではなく、評論文の基本構造を理解するというを目的とした授業を構想することを狙いとした。

研究授業では、序論と結論の首尾照応に不足がある教材を扱った。首尾照応の不足に学習者自ら気づかせることによって、論理的な叙述に関する意欲を育てていく。その上で、不足した部分を学習者が自ら補うために、書き出しを作成させた。この作成の活動によって、読解の際に学習者は教材と主体的に向き合い主体的な学びが促進することを狙いとした。

実践授業の結果、論理的文章における構造などの特質に関する理解が深まったと感じた生徒が半数以上存在した。一方、課題としては、序論の文章を書くことについての難しさを述べる生徒が多くいた。実際の記述においても結びの部分と照応した内容を書けている生徒は少数であった。このことから、高等学校段階においても、小中学校で指導されているはずの文章の構造をまだ意識することが出来ていない生徒が少なからずいることが分かった。そして、高等学校の教材においても、首尾照応の関係を意識させる授業の意義が改めて確認された。発展課題実習においては、以上の課題を踏まえた上で、改めて授業を構想し、実践を行うこととした。

## 3. 発展課題実習 I の概要

発展課題実習Ⅰでは前回の実習と同様、文章の首尾照応に問題が見られる教材の構造を読み取り、その首尾照応の不足を補うための書き出しを作成する授業を構想した。この活動によって、学習者はより主体的に読解を行い、全体構成を捉えることが可能になると考えられる。また、この記述活動をした後、グループワークをし、意見を交換させた。この活動をとおして生徒の記述内容を洗練させていく対話的な学びを引き出すことを狙いとしたりした。

実践授業の結果、書き出しの作成によって本文へ向き合う姿勢が涵養され、教材の内容や評論文の特質についての理解が深まった生徒が増加した。課題としては、序論の作成に困難さを感じる生徒がいた。また、質問紙調査において対話的な学びの効果について言及した生徒は皆無であった。以上のことをふまえ、後期の発展学校実習においては、上記の成果と課題を踏まえる形での授業を構想し、実施することとした。

#### 4. 発展課題実習Ⅱの概要

後期の授業においても首尾照応の不足を補うための書き出しの作成を授業の中心とすることとした。後期においても前期と同じく初回と最終の授業において、二度冒頭部分の作成を行わせることにした。さらに、最終授業のグループワークではグループでの序論を作成することでお互い作成した内容を相互に確認し、他人のまとめたものを見ることによって、自分の意見の不足を補い、より完成された序論の完成を目指した。

本実践授業の成果としては、初回の記述作成に比べて無記入者の減少が確認された。また、冒頭の書き出し作成時にレトリックを使用する意識が涵養されることがわかった。グループワークでは統合した記述を作成することにより洗練された記述が作成されることが分かった。

#### 5. まとめ

本研究を通じて、評論文において主体的・対話的で深い学びを喚起するために、書き出しなどの記述作成活動が有効なことが明らかになった。今回のように、本文につながる記述を作成するという活動を行えば、自身の理解度をメタ的に認知することが出来るようになる。このことは、文章を書く能力の向上につながるだけでなく、より文章を深く理解しようとする姿勢が養成される可能性があることが分かった。

また、自身の理解内容を視覚化することは教師にも恩恵をもたらす。生徒の記述内容から、理解できている箇所とそうでない箇所を把握することができるからである。これによって次の授業計画の改善につなげることができるだろう。しかし、だからといって授業の全てを書く活動にすることは現実的ではない。これは記述活動の時間を十分に確保した結果、文章についての説明をする時間が減少してしまう。抽象度が高く、生徒が自力で理解することが困難である評論文の内容を説明する時間は、やはり一定数必要である。それが教員からの一方的な説明に終わらず、簡潔に、しかし確実に生徒の理解を促進するよう行うことは、本研究に残された課題である。評論文の内容を確実に生徒に説明をすることと生徒が自身で文章の読解に取り組む時間のバランスをとることが重要だと考えられる。